

図書館だより

No. 3

平成 26 年 6 月 27 日発行

平年よりも3日早く関東甲信地方も6月5日に梅雨入りが発表されました。雨の日が少なかった5月の分まで降っているように感じられるほど、本当に雨の日が続きましたね。

この梅雨の時期は休日も外出せず、家で過ごすことが増えるという人もいると思いますが、普段はやらないようなことにも挑戦したり、日頃の疲れをゆっくりと癒すような過ごし方で、雨の日を楽しみましょう。

さて、6月にはブラジルでFIFAワールドカップが始まりました。連日、各国が熱い戦いを繰り広げています。日本代表選手たちも強豪国を相手に健闘を重ねましたね。残念ながら日本は決勝トーナメントに進むことはできませんでしたが、この後、始まる決勝トーナメントも各国の選手を応援していきたいですね。



凝りに凝ったお菓子作りに挑戦*

596-モ 『アイシングクッキー&カップケーキの本』 森 ゆきこ || 著 日本文芸社

クッキーの上に砂糖と卵白で出来たクリームでデコレーションをしたアイシングクッキー。そのかわいらしい見た目は、お菓子なのにもったいなくて食べられなくなってしまいそうなほど。自分で作るのは難しく感じますが、自分だけのオリジナルのクッキーが作れるというのは、とても魅力的です。

この本で紹介されているデザインはどれも眺めているだけで幸せな気持ちになってしまうかわいらしいものばかり！さらに、クッキーから作るのは面倒…という人のために市販のお菓子を使ったレシピも載っています。

普段なかなか挑戦してみる機会がないこのアイシングクッキーを雨の日の休日に作ってみませんか。

ブラジルをもっと知ってみよう*

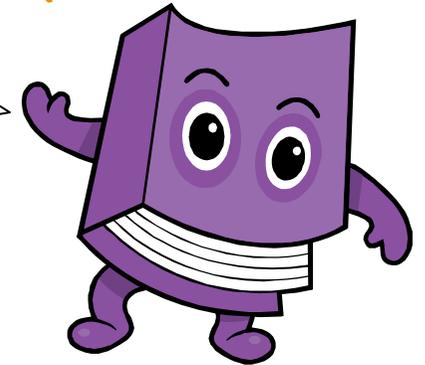
296-オ 『ブラジル、住んでみたらこんなところでした』 岡山 裕子 || 文・写真 清流出版

ワールドカップで盛り上がりを見せているブラジル。さらに、2016年にはオリンピックも控えている注目の国ブラジルが、どんな国なのかをこの機会にもっと深く知ってみましょう。

この本はブラジルのサンパウロで暮らす著者・岡本さんが見たことや実際に体験したことが綴られています。華やかな魅力から抱えている問題まで幅広い情報が載せられていて、わかりやすくブラジルを知るのに適しています。「ブラジルのお菓子はとにかく甘い」、「洋服や雑貨の独特な色使いがかわいい」、「素敵な笑顔があふれる国」など、ブラジルに心惹かれる言葉にたくさん出会えます。

本の返却ポストを設置しました

本の回収時間：月曜～金曜（休館日は除く）の
午前11時ごろ
※悪天候または悪天候が予想される場合。
使用できないことがあります。
ポストに入らない大型の本または破損のある
本はカウンターに返却してください。



秋草記念館の玄関前に返却ポストを設置しました。この返却ポストには本校図書館で借りた本を返却することができます。

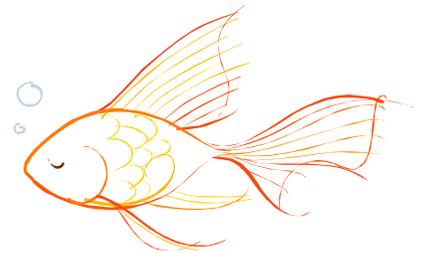
今日は返却するだけだから、簡単に済ませたいなという人や部活があって開館時間内に図書館へ返却に行けないという人などに活用してもらいたいと思います。

アートアクアリウムに行ってみよう

7月11日(金)から日本橋の日本橋三井ホールにて『ECO EDO 日本橋 アートアクアリウム2014 ～江戸・金魚の涼～ & ナイトアクアリウム』が開催されます。

このアートアクアリウムはこれまでに累計300万人を突破する来場者が訪れている人気の展覧会です 展覧会の主役は金魚。涼やかで、優雅な金魚たちが和をモチーフにデザインされた水槽の中で泳ぐ様子は、まさに水中アート。見る人の心を奪います。

日本橋でのアートアクアリウムは9月23日(火・祝)までとなります。都合の良い日を見つけて、足を運んでみてください。



金魚の美*

748-タ 『きんぎょ』 高岡 一弥 || アートディレクション パイ インターナショナル

その名のとおり、金魚づくしの1冊。金魚の写真だけでなく、金魚をモチーフにした絵や器、小物などがオールカラー約400ページで紹介されています。写真もレイアウトも美しく、眺めているだけで、まるで金魚の美術館を訪れたかのような楽しさを感じます。

最初は衝撃を受けてしまうかもしれない個性的な金魚たちの写真も見ているうちに愛らしさが湧いてきます。最後に、金魚の解説が載っているので、この本で金魚の魅力に気がついてしまった人はそちらもお見逃しなく！

未来を切り開くためのキーワード

『未来を切り開くためのキーワード』第3回目のキーワードは“働き方を考える”です。

今は学生であるみなさんもこの先、社会人として、働くという立場へと移り変わっていきます。みなさんがそれぞれの心の中で、だんだんと“なりたいもの”、“やりたいこと”を描き始めている頃かと思いますが、まだまだ悩んでいる最中だという人も多いはずですよ。

今、世の中には多くの職種があり、様々な働き方があります。そこから自分のなりたいもの、やりたいことを見つけ出すまでに、みなさんはたくさん悩み、考えていくと思います。その過程の中で、役立つのではないかなと思う本を紹介します。じっくり丁寧に考えて、自分の道を見つけ出しましょう。



本気で開業・わたしのお店

336-7 『わたしのお店のはじめかた。』 わたしのお店のはじめかた。編集部 || 編著
毎日コミュニケーションズ

2014年の調査で、女の子の憧れの職業第1位はパン・ケーキ・お菓子屋さん。4位は花屋さん、9位がアイスクリーム屋さんです。すでにあるお店に就職するのも手ではあるけれども、もし、自分でお店を持たせたら、自分らしい素敵な空間をつくり上げてみたいと夢は膨らみます。しかし、現実にはなかなか手ごわいのです。お店をだすためには具体的なノウハウや考え方が必要です。お店を出したい動機やアイデアから、イメージを固めたりしなければなりません。資金だって重要です。長期戦を覚悟して、一步一步、目標をかなえていくために先人たちの例を参考にして、憧れを現実にしていきませんか。

悩んで、悩んで、決めていこう

366-6 『14歳からの仕事道』 玄田 有史 || 著 理論社

「自分が社会人になって働く姿をうまくイメージできない」、「やりたいことをどうやって見つけたらいいのかわからない」など、働く前から働くことの悩みは色々あります。そんなみなさんが抱えるモヤモヤとした働くことへの不安や悩みを一緒に考えてくれるのが、この本です。

自分の未来を描く上で悩んでいることを「そうだね」と、受け止めてくれた上で、自分で考えていくこと、色々な人に話を聞くことなど、当たり前だけど、でもそれをどうやってしたらいいのかわからないということに対してアドバイスをくれます。そして、実際、働き始めると、そこにはどんなことが待ち受けているのかという話も載っています。不安や悩みがこれで全て解決、とはいきませんが、働くことへの希望が湧いてくるのが感じられます。

伝統を受け継ぐ

750-ス 『女職人になる』 鈴木 裕子 || 著 アスペクト

職人と呼ばれる人たちが少なくなってきた現代において、職人として働くことを選択した女性たち。普通の家庭に育った彼女たちがどのようにして職人になったのか。師弟関係や修行生活はどんなものなのか。その“本当のところ”を知りたいという著者自身の強い興味もあって始められたという取材。そこから見えてきたものは、「どんな厳しい環境だとしてもこの仕事がしたいんだ」という深い熱意と諦めない心でした。自らの手でひとつひとつ丁寧に想いをこめて、モノを作り上げていく職人という仕事のかっこよさを憧れを抱かずにはいられません。

また、江戸切子、結城紬、京竹工芸など日本で古来より受け継がれてきた様々な伝統工芸のよさと美しさ、そして、それをこれからも受け継いでいくことの大切さを改めて感じさせられます。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

今月は普段はあまり読まないSFのジャンルから本を手にとってみました。選んだのは山田宗樹さんの『百年法』(913.6-ヤ 角川書店)です。不老化ウイルスの発見により、永遠の若さを手に入れた人類。日本も米国にならない、不老技術“HAVI”を導入する。ただし、HAVIを受けた人間は、生存制限法によって、100年後に死ななければいけない。そして、その生存制限法が執行される初めての年をいよいよ迎えようとしているところから物語は始まります。

制限された生から逃れるため生存制限法を凍結させようとする動きと、それを危ぶむ者たちが必死に抵抗し、長い闘いが繰り広げられます。

老いのない人生とは、寿命の決められた人生とは、人間として生きるとはどういうことなのか、自分だったら何を選んで生きていくのだろうか、小説ながら生について様々なことを考えさせられました。

【今井】



以前読んで面白かった本の2冊目が出たので、さっそく読んでみました。383-ブ-2 『英国一家ますます 日本を食べる』マイケル・ブース著 亜紀書房刊。前作の続きというわけではなく、前回載せきれなかった章にエピローグを書き加えてまとめてありました。

1冊目が日本の和食“店”での経験が中心ならば、こちらは“素材”への探求がメインになっています。本ワサビ・和牛・フグ・沖繩の豆腐等々の産地を訪ね、調査を重ねます。そうしてカツオは内臓を塩漬けにして珍味に、骨はサプリメントへ、鰹節を作る時にできる煮汁さえエキスを取だしラーメンの風味づけに利用し、なにひとつ捨てる場所がないなんて、日本人でも知らないことがさりりと紹介されています。日本の食に関する答えのわからない謎、難問、疑問はまだまだあるそうなので、続巻への期待が高まります。しかし、竜安寺の石庭を踏みつけ足跡を残す息子と一緒に、おちおち日本を堪能できず、続きは彼が大人になってからかもしれません。

【鈴木】